

ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵

黒川真頼詠・同春村評『も、ちとり』翻刻(三)

香山 キミ子

凡例

- 一、本稿は『清心語文』第十三号所載、「ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川真頼詠・同春村評『も、ちとり』翻刻(二)」に続く翻字成果である。
- 一、今回は恋部八九首(二九オ～三六ウ)、雑部一二二首(三七オ～四四ウ)を翻字した。
- 一、春村朱筆書入の評語類は各歌の左側上部及び下部に記されており、原本通りに翻字した。
- 一、春村朱筆書入による添削箇所についてはすべて当該歌の右側に付した。
- 一、漢字の字体は原則として現行の字体を用いたが、「峯」「濱」などのように一部原本通りにした場合もある。
- 一、見せ消し点は稿本では概ね左傍に付してあるが、翻刻に当

たつては印刷の都合で右傍に移し、すべて「、」で統一した。  
一、添削が入り組んで読みにくい歌については、読みやすい形で当該歌の左側( )内に記した。

一、墨で塗りつぶした箇所は■で示した。  
一、五二頁上段「かち枕」は「旅」題の貼布歌であり、「鞆中述懐」題「のきのつま」の歌はそれに続く貼布歌であると思われる。

翻刻

恋

青淵にあそへる魚のひれふりてそこひもしらすいるこゝろか

な

そこひもしらす序に今すこしうちあはぬ状 又恋のかたにとりては落句いらるゝとあらまほし

写ますらをの山をぬくてふ〇ちからも恋にしあはゝたへすや

あるらむ

に文字おたしからず

写世の中に恋てふことのなかりせはふかき心はなにゝみえまし

よろしくや

ものゝあはれはこれよりそしるとあるよりはすこしおとれり

初恋

写いひやせむいはてやあらむおほつかなこや世の人の恋といふ

もの

これも

写うれしともうしともわかつておちそむる涙や恋のはしめなるら

ん

いとよろし

欲言出恋

写かくなからいひもいてなてこひしなはよの常のとや人にいはれむ

よろしくや

人にはれむの句今すこしあるへし

不言恋

写木かくれに〇花さきそめし山吹のいはぬいろをも人はしらな

柴 ひとり

よろし

し文字おたしからず

写いはしたゝいひいてゝ人のつれなくはいはぬに増るおもひこ

そせめ

これも

いはぬよりこそ思ひまさらめとあるへき状

写夏草のひるはしなひてくれゆけはもゆる蛩そ身のたくひなる

よろしくや

忍恋

写よしやなたゝはたちねとおもふこそしのふ心のよわりなり

けれ

これも

よわりをかしからず

写ものおもふ身をしるあめのいかてかはつゝむ心にそむくなる  
らむ よろし

写わか袖の涙の川をせきわひてくみしられなはいかにしてまし  
よろしくや

忍涙恋

写たへかねてもらす涙を朝ことの鏡のほかはしる人もなし  
たみ も これも

写落たきつ滝のしらたまひろひぬと人にはいはむ袖の泪を  
つ よろし

聞恋

写秋風のふきあけの濱にさく花の名にのみ人を恋わたるかな  
これも

写おとにのみきくの濱わをふみみねはまたみるめもひろはさ  
りけり 又

見恋

写をくるまのをすのすきかけみてしよりひかれそめぬるわか心  
かな ことによろし

時津風雲るにふきてうつしほのみつとはかりに恋しきやなぞ  
四句今すこしか

不見恋

写音にきくあふくま川の遠ければ恋こそわたれかけをたにみて  
よろしくや

僅見恋

ほのみえし軒はのをすのすきかけのはやも か、りけるか  
な

夢見恋

あふゆめにあはぬうつゝをことならはかへてみるへきよしも  
あらなん 二首ともに今すこし

尋恋

写ちさとゆく駒もあらはえてしかなのりて尋む人の行へを  
よろしくや

祈恋

写 あはれとも神もみそなへいさ川やいさめぬ道にまとふ心を

写 今はたゝありてかひなき玉のをゝたえねと神にいのるはかり

そ

に

写 いのらしよ平野の松の露にさへしくれにさへもつれなかれと

は

いづれもよろしくや

祈不逢恋

写 かくはかりいのるかひなきわか恋は心やあさき神やいさむる

いとよろし

誓恋

写 大ひえをしかの浦波こえはこそ君とちかひしこともたかはめ

すくれてよろしく聞ゆ

契恋

写 恋ゆゑはおろか心となりにけり来ん世をさへもちきるはかり

よろし

写 かはらしなわれもかはらし年ふとも思ひわするなわれもわす

れし

よろしくや

憑恋

写 たのむるにいのちものふるこゝちかなあはゝ千とせもいくへ

かりけり

これも

憑媒恋

写 山畑に賤かつくろふからうりのなりぬときくもうれしかりけ

り

待恋

写 あはてふる年月よりもおきあつゝまちくらすまのはるけきや

なぞ

写 たのめてしそのよのみかの月影のもちになるまであはぬ君か

な

写 恋くゝてわかまつ君は月影のいてゝ山ちを今やこゆらむ

待空恋

写 わか中はうときへたてのさよ衣いかなるかたにうちかはすら

ん

来不留恋

写 ふりはへて君かこしちはうれしきをつらくも山の名にかへる

かな

すへてよろしくや

不逢恋

写 ほかにもみてたにたへぬわか恋をあはぬや君かなさけなる  
よろし  
らん

写 あふことはなにはの浦のあま衣まとをにのみもなり増るかな  
よろしくや

写 はりまなるしかまのさとにぞむるてふよかれかちなる恋もす  
るかな

難逢恋

写 わきも子か手ふさにまけるたまさかにあふせもあらはなにか  
すきの玉の  
これも  
歎かむ  
手ふさ快よからず

逢恋

写 あふよはの枕のちりははらへともあすの  
おもひ  
をいかにしてま  
よろしくや  
し  
写 かくはかりあまるなさけをこよひまでいかにかくしてつれな  
よろし  
かりけん

名立恋

写 から衣はるの桜の陰ならてたつことやすきわかうきなかな  
よろしくや

写 小山田にはふるなるこのなはたちぬ人に心をひかれてしより  
いとよろし

あふくまは袖つくはかりありしかとうき名取川はやくもある  
かな  
もの、ふの  
浅き川ならねはいか、  
ことよろし

写 馬場にいて、のる駒のたつなくなるしき恋もするかな  
ことよろし

惜名恋

写 こひしぬもたれゆゑならぬもの  
なれ  
としられん後の名こそを  
しけれ  
せきもせしうきなもともに泪川なかれて身にもかへらさりせ  
は

立無名恋

君とわかまきしうき名の種ならばつ  
まる、とでもうれしからまし  
いつれもいますこしつ、けからいか、

不惜名恋

写 はよしや名よたちなはたちねをしからはしなむはかりのものは

思はし

よろしくや

増恋

いやましにまさるおもひのくるしきにのせてすつへきあし舟  
もかな

あし船不覚悟

別恋

写庭のかけ門田のしきの百羽かきしきりになりぬきぬくの空

発句今すこし

写ひきとむる袖のわかれのたゆたひにしらみしひまも日影さし  
つ、

よろしくや

のこれも露けかるやと有明の月にとひつ、ひとりこそくれ

詞たらぬこ、ちす

明はて、ゆかはたつ名とふかきよのわかれといつれをしくも

有かな

句々と、のひわろし

後朝恋

写 わかあふ、ことに命をかへはわかれてのけさかく物はおもはさらま

し

よろしくや

顕恋

かり衣しのふのみたれかきりありてつひにはいろに顕れにけ  
り

上句いますこし

写雲はらふ嵐のちの月なれやのこるくまなく顕れにけり

よろしくや

切恋

写のちにたにおもひけりとも君しらは恋にしぬともをしからな  
くに

これも

よしやわか

わみ

玉のをよたえなはたえね絶ぬとも君かあたりははなれしもせ  
し

よろし

(よしやわか玉のをよわみ絶ぬとも君かあたりははなれしも  
せし)

思恋

写春の日にあかるひはりのねをそなくおもふ心は空になりつ、

これも

写わか恋の山はよしの、おくなれや身をすて、こそ思ひ入ぬれ

よろしくや

思煩恋

目には見す音にはき、ぬやまとなる君にゐるてふ耳なしの山

今すこし

写夏しらぬみ山のおくの庵ならてかひなくてのみすくるところか

な

よろしくや

て文字わろし

片思恋

写いひなすはよの人ことの常なるをありのままにもつらき君か

な

一二句今すこし

写恋やせに身はやせけりなみちのくのけふの細布むねもあふま

て

よろし

被厭恋

写大空のいとわはれてより、袖のうへに身をしる雨のふらぬ日そな

なから

き

変恋

写かはりゆく人の心の種もかなわする、草を身にもまかまし

これも

写たまのをよたのめし人の言の葉とともにたえなてなにのこる

らむ

ともによるしくや

被忘恋

写ちかひてし人の命はこしなくてわか玉のをの絶ぬへきかな

写今はた、たれ住の江のきしもせて忘くさのみしけりゆくかな

これらも

悔恋

写あらいそによせくる波のたちかへりくひてかひなき人のこ、

い

ろか

又

絶恋

写中絶て年もへにけりいとひてしうき名はかりを思ひてにして

又

かさ、きの橋もつくるを秋来てもたとふ〇方なく絶し中かな

る文字なきはいか、

欲<sup>欲</sup>

歎絶恋

写風わたる軒はにかゝるさゝかにのいとたえくになれる中かな

よろしくや

馴恋

写朝な夕なしほさるひとくあはの海になるとはなしになれし君

これも

かな

疑恋

写身におはぬ君かこよひのかねことにいらふ〇言葉もたゆたはれつ、

る文字たらず

隔関路恋

写うとかりし衣の関をいまはた、中にへたて、あふよしもなし

よろしくや

負恋

ミネ

タレ

峰にふる雪みるとの、玉すたれまけて恋しき君にもあるかな

被<sup>レ</sup>巻をまけてといふは俗語

通書恋

玉章のたよりはかりに遠つ人かりそめににとふおとつれもなし

玉つきのたよりも又おとつれなるへし

両方恋

写かにかくに心そうつる朝なくおほふ鏡のふた方にして

よろしくや

老恋

写恋草の色はむかしにかはらねと人の心の駒もすさめす

スサ

これも

幼恋

写咲そめしは、そかもとのなてし子を人のつむらんことをしそ思ふ

又

独寝恋

写あはぬよをかさねけるかなひとり寝を身のならはしとおもふ

よろし



恋天象

写 わか思ふ心をしりてさそふらん月にはみゆる人の面影

さよは

写 山のはに出くる月の君ならば○ふくとも何かなけかさらまし

恋地儀

写 人心浅間の山の浅ければわれこそもゆれむねの思ひに

いつれもよろしくや

人のつれなかりけるに

写 てる月の桂の川にすむあゆの手にもとられぬ君にもあるかな

つひには

て心

写 おしかへしいつしか手にもならしむむ人あらしきの真弓なりとも

ともによろし

めつらかなるもすくなからで感気ふかく覚え申候

真頼

嘉永元年極月四日

古今序考はすこし見あはせてのうへに申すへき考あれは

春のたよりまであつかりおき侍り

歳末いはひ給はりをさめ侍りぬ

立春

春きぬるけしきもしるく大八嶋かすみそめたるけさのとけさ

よろしくや

元日

やとことに朝戸やりをそいそくなる御代あたらしき春にあふと

霞

これも

ふしの根にたえしけふりを久方の空にまかひてたつ霞かな

よろし

梅

はる風はみな梅か香になりはて、あらぬ里さへかほる頃かな

よろしくや

天

神代には遠からさりし天の原いとほるかにもなりにけるかな

いとよろし

地

ふた神のつくりたまひし大八島な、つの道の国となりけり

よろしくや

雨

山里の草のいほりにふる 音を雨とき、しる よはのしつけさ

よろし

ぬれしとて袖うちはらふかひもなしさの、渡の雨の夕くれ

ほたの火も

よろしくや

暁

ねさめしてひましらむまを松の戸にちかき野寺の鐘そきこゆる

可然候

春の田のかたかけるに

かへさるゝものともしらて咲にけりあはれ山田のすみれなつな

は

よろしくや

関

ふりにける名のみと、めて鈴鹿山すゑけん関の跡ものこらす

よろし

坂

つはもの、ふまひてならのみ代よりそ木曾のみ坂はふみはしめける へ

可然候

橋

朝な夕なかよひなれけむ少女子をしのひそ渡るまゝの継橋 をとめ子か にしいにしへ

よろし

池

島の宮まかりの池は水かれて月影さへもすますなりにき、

けるかな

いとよろし

海

わたつみはあやしきものか沖津浪花にさきたち雪にまかへり

よろしくや

故郷

今はた、あすかの都名のみにて空とふ鳥の跡ものこらす

これも

おとにきく大津の宮の花盛あれにし後はしかの浦波

よろし

かせの山くにの都はさく花のひとさかりにてうつろひにけり

よろしくや

仙家

百とせをひと春にみる住ひにや花にあくてふこともしるらむ

今すこし

廢宅

年ことのその春秋のつはめさへ、今はすまはすなりしやとかな  
くらめそれさへ

今すこし

燕は古人つはくらめとよみてつはめとよます

万葉集にた、一首燕をツハメとよめるあれと

調点なればたしかなる証としかたし

猶例あるか考ふへきものぞ

閑居

市人のあくれはとよむ大路にもすまる、物はこゝろなりけり

これも

心をはかけひの水のひとすちにおもひすませる山陰のいほ

よろしくや

幽居虫

駒なへてとはれしことはむかしにて門のむくらにくつわむしな  
これも

庭の面はむしの住かとなりにけりはてはいほりもなれにゆつら  
可然候

寺

くも霧のかゝるくらまの山寺に法のともしひあかくも有かな

よろしくや

さひしきは高野の奥の朝ほらけ木ふかき谷の有明の月

可然候

別

と、めわひしたふわか身の駒ならば君にひかれていなましもの  
これも

を  
をしとでもつひの別にあらなくにさらにいくへきこ、ちこそせ  
ね  
又

旅

なに、わか枕むすはん夕まくれ木にも草にも風やとりけり  
わかのれる駒のたてかみうちなひき嵐ふくなり足柄の山

つたかつらしけるよりもふりつみてゆきそわつらふうつの山  
越

梢ふく山ちの秋の旅衣なみたも袖にちる風かな

風にゆく雲のみ旅の友と見ていく日かきその山ちこゆらん  
草枕寢覚てきけは賤のめかたれにかすとて衣うつらん

旅といへは野辺の草葉をいなむしろなれにしやとにしく物そな  
き

のる駒はいたくつかれぬ箱根山さかしきみ坂いかて越まし

ねぬる夜  
かち枕うきねの夢もさめぬまで○波のうへにそ旅なれにけるり

日頃経て きねも  
いづれも一ふしありとはみゆれと よろし

鞆中述懐

のきのつまかきのなてしこわれなくはよもきむくらにさそなや  
つれん これも

旅泊

名にしおへはゆかしくもあるか妹か鳥かたみの浦の波のうきね  
も 初句今すこし

波まくら月は都にかはらねとみやこにもぬこ、ちこそすれ

山家

山里のおのつからなる花をめて紅葉にあかてわれはへぬへし

今すこし

うつほ木のむかしもかくやけたもの、なれてとひくる山のかく  
れか 可然候

ふしのまの山居とおもへはわか軒のかけひの竹はくちはてにけ  
り 二句いまずこし

わか軒の花さきにけりあはれまたことしも春になりけるかな  
おちしひもおひて木高くなりけりわか山住もかくそへにける  
ともに今すこし

山居

山陰やなかる、水の音きけはすまぬ心はあらしとそおもふ  
は 清み も

山ざとの松の嵐の夕くれはうきよの外のうき世なりけり  
に風ふく

よろし

今はた、世のうきことに引かへてき、こそなれせ軒の松風  
ら

よろしくや

みよしの、よしの、奥にのかれてもなほちる花のうさは有けり

可然候

田家

真柴もてかこふ山田のひとつ庵とひきてみれば人もすみけり

よろしくや

述懐

むらきものこ、ろにもかなますらをか山をぬくてふその手力を

今すこし

筆とりて硯のうみしことをしも思へは今そくやしかりける

可然候

老の身のうへにはおなし月も日もはやく過行こ、ちこそすれ

よろしくや

いにしへの人の心の高間山よそにのみ見て年をふるかな

よろし

かくはかりをさまれる世にあへる身を山へにとてはなにおもひ  
けん

可然候

身をかくすかくれかにせん数ならぬことはのちりも山とつもら  
は

よろし

人のよ、まさしく夢にあらませはさめてかへるもうれしからま  
し

今すこし

おもふこといふかひもなし口なしの山の岩木といさやならまし

よろしくや

懐旧

ありしよのありのすさひをおもふにもあるはすくなくなりにけ  
るかな

今すこし

さきたちし人はあまたにをしまれぬうへおくる、はすさましの  
よや

よそにとふ螢を見てもかなしきは消にし玉の行へなりけり  
すみの江の松を久しといひしよのそれさへ遠き昔なりけり  
白雪のつもるを見てもうの花の色によそへし新裘をそおもふ

四首可然候

思往事

なにこともきのふの夢とたとるまにまたけふの日も入相のかね

よろしくや

苔

みよしの、青根か峯の苔衣春は霞のたちてみえけり

よろしくや

位山名にのみ立、岩かねの苔の衣は○みとりなりけり、

高くみゆれと

た、

のみ

いとよろし

竹

しけれど、よのうきふしのかくれかにわかおほしたる窓の呉竹

ことよろし

松

みや人の舟まちつけしこと、へは松

さへしらぬ

唐崎の濱

峯高み松の葉うつむ白雲のはれても空の色かとそみる

ともによろしくや

うちわたすはなれ小島のひとつ松風のつてにや種はまきけん

たかいつの世に

すくれてよろし

人すまぬふるきみ寺にたきもの、けふりおほへてたてる松かえ

可然候

雀

朝日影ならの梢にうつろひはまぢよろこひて雀なくみゆ

よろしくや

鶴

おのかよに千とせをもたるあしたつはあゆむ姿ものとけかりけり

ふりさけてみるものとけし朝日影にほへる空に遊ぶまなつる  
わかの浦やなきさに田鶴の声すみて秋風寒し波の上の月

可然候いつれも

鶺鴒

風あらし磯の波間にうき沈みあなうと鳥の音にや鳴らん

桐

わかそのにうゑおほしたる桐の木はことなるへくはやもなら  
なん

ともによろしくや

十二支をよめる

初春のか、みもちひをとりてけりあはれ鼠の心うつして  
大君の大み車のくるしさをうしともしらてけふはひくらん

唐くにの虎てふ神をたはやすく手にとり てけり ひのしりの君

春あさき野さはのうさき夕されはみしかき芦をふしとにやする

いつれもよろしくや

大空をかけらふ龍もかくるれは硯の水をすみかとそきく

先詠あるへし

さく花の木つたふへみは千年へて雲にのりえしこ、ちこそせめ  
くらもおきあふりもかけつわかのらはあしとくあゆめ牧の若駒  
大君のめくみの露にひつちさへ筆のみつきと毛をたてまつる  
いたつらにちらしもやらて山桜花にましらのあはれなるかな

いつれもよろしくや

山の端に月影おちてをちこちの里わの鳥の声しらみゆく

よろし

大君のみかりの小野を行かへりいぬもつかふるみ代にも有かな

よろしくや

あたといへはきかみいかりてむかふるのたけき心になりみてし

かな

蝙蝠

おのかし、ねくらにいらりて夕されは鳥なき里にあそふかはほり

これも

酒

すめるよのさちにこそあれおはたからにこれる酒にゑひて遊ぶ

よろしくや

酒ならてよもきか鳥を尋ぬともよはひをのふる葉あらめや

よろし

弓

かつらきのそつ彦真弓もなほそのつる音そよにひ、きける

よろしくや

琵琶

あふ坂や関のわらやのもの、ねをあふみの海の名にしのおかな

湖水を琵琶湖といふ事 竹生島縁起にみゆるのみにて

作例もみえねはいか、あらむ

筆

しき島の道の玉ほここれならむ人の力の筆にみゆれば

よろしくや

書

久方の天の浮橋ふみ、すはいかて神代のことをしらまし

よろし

將軍

弓張の光りくもらぬ大空をふりさけみつ、たれかあふかぬ

よろしくや

隱士

ゆく人のおほちのとかに庵しめてふみにゆたぬる人はたれそも

今すこし

僧

苔衣くさ葉の露をかけてこそつひには玉の光りをもみぬ

よろしくや

商山四皓

人しらぬみをの仙なるかしこきも道あるみ代にひかれいつらん

これも

佐々木高綱宇治川をわたるかたかけるに

はたかけん

こ、をせとおもひいらすはもの、ふの八十字治川に名やはなかれん

今すこし

名を流すとは憂へき名のたつこと、おほゆ

明智光秀

おもふことなしもはたさて山崎にこるやまかりの名こそをしけれ  
ことによろし

釈教

天津日のもとモトの光りはおもほえて月みてあふく人も有けり  
今すこし

祝

山にのみきこゆるものとおもひしに里にも今は万代のこゑ  
大空をおほふはかりの袖もあらはこのうれしさをつゝ、みしもせめ  
ともによろしくや

薦

高安のさとの梢に薦そなく いまもなほやまと人くとうくひ  
すそなく  
よろしくや

春雨

おい木さへめくみにもれぬはるの雨かな いそのかみふるの、  
わかれさこそもゆらめ  
今すこし

氷室

夏もなほむろの氷りのきえせさりけり かすかの、神のみたま  
のふゆにや有らん  
これも

月

あかなくに月のかたふく山はありけり いかてわかおもふこ、  
ろのはてなかるらん  
よろしくや

雁

とこよ、り月もみちもてり増るらし 秋されは友うちつれて  
かりはきにけり  
これも

せとう歌は古今集なる体を猶よく考へ給へ

初春

としたちぬれはいと、しく心いとなく覚ゆなれ のみこそ 野辺に沢辺に  
うちむれて小松わかなにひかれつゝ、  
よろしくや

落花

春の日数のうつろひは心と花はちるものを 風のとかもおも  
ひしはわれをかへりてうらみなむ  
今すこし

すへてわろしとには侍らねと いますこし秀逸あれと  
思ふこゝろなきにしも侍らす

嘉永二年正月六日記

(かやま きみこ) / 一九六七年卒業)